

伝統ある精神科病院の 院長の職を担って

門司 晃

慈光会若久病院院長



■ 当院の紹介と現状

2022年3月末日をもって、20年以上に及んだ九州大学および佐賀大学における大学教員としての職務を大過なく(?)終えることができ、平成の初めからの約30年以上、非常勤勤務としてお世話になっている福岡市内の病院の院長となってから、早いもので5年目となった。勤務先の慈光会若久病院(以下、若久病院)は九州脳病院の呼称で1933(昭和8)年に創立された、福岡地区では最も歴史のある民間精神科病院である。定床59からスタートし、1935年には宮崎にも脳病院(現宮崎若久病院)を設立した。戦後に九州脳病院は慈光会若久病院と改称され、1963(昭和38)年の創立30周年には定床280、1968年には定床370を数える



までに発展した。歴代の院長の中には、九大精神科同門会長を務めた今任準一、高松勇雄、久留米大学精神科教授であった前田久雄名誉院長も含まれ、九大精神科にとっても重要な関連病院であったことがうかがわれる。戦前から90年以上に及ぶ当院の長い歴史とともに建物の老朽化は進み、病院の建て替えは懸案事項となっていた。2023年半ばに多くの建物は一新され(写真)、同時に305床にスリム化された。歴史ある病院の極めて大事な時期に院長の任を担う喜びと責任を日々痛感しているものである。

■ 精神科の現状と今後の予測

病院管理者となった今、常に考えておかなければならないのは、これからの本邦の精神科医療の動向である。私が医学部を卒業し、精神科医となったのは1985年であるが、厚生労働省の調査によると、1996～2023年の精神科医療の傾向は、およそ①から③のうにまとめられている。

- ①入院患者数は減少、総患者数は増加
- ②統合失調症の患者数は微増、気分障害、神経症性障害、アルツハイマー病患者数が増加
- ③若年入院者数は激減、高齢入院患者数が増加

結論として、「約30年間で入院中心医療から、通院中心医療へと変化した」とされているが、このことに

異論のある精神科医はいないと思われる。

一方、青山学院大学教育人間科学部教授／同大学保健管理センター所長の稲垣中氏が神戸市で開催された第121回日本精神神経学会(2025年6月19～21日)で報告したデータでは、今後の精神科医療の動向についてはおおよそ次のように試算されている。

まず、2025年時点の日本の総人口である1億2281.7万人から2050年に9554.4万人へと減少する前提で、

①アルツハイマー病患者数を除く「精神及び行動の障害」患者数は、2025年の484.6万人から2050年に373.6万人となる。

②「精神及び行動の障害」の入院患者数は2025年の21.3万人から、2035年に20.9万人、2050年に18.6万人となり、アルツハイマー病入院患者数は2025年に5.5万人、2035年に6.1万人、2050年に5.7万人となる。

③入院患者数については75歳以上が2025年に12.3万人、2050年に12.6万人となる一方で、74歳以下は患者数も入院患者数も一貫して減少する。

■ 病院の新しい取り組みと今後の展望

以上の試算から考えると、1996～2023年に起きた以上の変化が、多くは少子高齢化の結果として、これから2050年までに精神科医療の中で生じることが容易に推定される。以上のようなことを念頭に置きながら、今後の病院の運営方針について考える必要があるわけだが、民間精神科病院の一院長には、対応しようもない問題が多々あるのも事実ではある。

まずは、従来からあった訪問看護に加えて、グループホームなどへの訪問診療の開始、発達障害などを含む激増する児童精神科領域の患者さんに対応するための児童外来の開設、同じく増加傾向にあるうつ病に対する非薬物療法としての経頭蓋磁気刺激治療(rTMS)システムの導入などを、病院長就任以来行ってきた。おかげさまでそれらの成果は少しずつ上がっていると自負してはいるが、100年近く続いてきた若久病院の歴史を、次の50年、100年へと継続させるために、気を緩めることなく院長業務に精励したいと考えている。